# 日本浪漫歌謡大賞受賞記念

## 昭和百年 ジュン葉山 特別公演

**輝ける日米ペギーの時代**

テーマ
愛する人のために生きる

出演
ジュン葉山
（Vo. /ピアノ/ エレクトーン/シンセサイザー）

プロデューサー
濱野成秋
（日本浪漫学会会長）

2025
7月10日（木）
開場 13時 開演　13時半
逗子文化プラザさざなみホール

時代考証及びプログラム執筆
濱野成秋

《開会に先立ち大賞報告会》

推薦者

| | |
|---|---|
| ソニーミュージック社長歴<br>エスプロレコーズ社長 | 若松宗雄氏 |
| 和泉流二十世宗家 | 和泉元彌氏 |
| 和泉宗家理事長 | 和泉節子氏 |
| 同志社女子大学名誉教授 | 福田京一氏 |
| 尚美学園大学准教授 | 河内裕二氏 |

報告

日本女子大教授・NY州立大客員教授歴
日本浪漫学会会長　濱野成秋

☆**受賞者**
ジュン葉山　（御礼の言葉）

# 第一部　　女が涙を流す時

## No.1 テネシーワルツ（昭和２０年代～現代）作詞：P.W.King & R. Stewart 作曲：P.W.King

　ダンスパーティで恋人を紹介したら、あろうことか、その子に恋人を奪われてしまった！　そんな光景をめそめそ語る、振られた女の子の歌。日本では終戦直後、進駐軍ダンスパーティで大流行。日本人も多数参加で。後に州歌に。

## No. 2 なぎさ橋ブルース（昭和９０年代以降）　作詞：濱野成秋(橘かほり ) 作曲：ジュン葉山

神奈川県逗子の浜辺は武男と浪子の『不如帰』で有名。伊藤久男と赤坂小梅が昭和11年に。この純愛物語は戦後も続いた。ジュン葉山の「なぎさ橋ブルース」は久々に「悲恋の橋」を徹底しようと作詞される。ストーリーは妻子ある男を愛して好きでも添えない。必ず戻ってくると言って、それっきり。あなたがくれた「さくら貝」を掌（てのひら）に握って、ヒロインは涙ながらに、「もう帰って来なくていい、わたしは空っぽの貝殻なの…」と絶叫。☆受賞作。CD近日完成。

## No.3 学生時代（昭和３０年代～現代）　作詞作曲　平岡精二　**さぁ、みなさんご一緒に！**

「学生時代」はよく「青学の歌」と言われるが、青学の学生はよく勉強するしミッションスクールだからチャペルにも自発的に行く。「ノートとインクの匂い…」人生の中で最も輝かしい時代を言い当てている。
☆かく申す筆者は青学の２部で１５年間、米文学特講を担当した。150人の大教室でプリントやパワーポイントを使わず、毎回、地図や作家名やキーワードを大黒板に所狭しと書いてノートを取らさせ、質問を受け、また語りながらサブノートにQ&A方式に書いて、全部覚えろと学生たちに強いた。この講義量は大量だったが彼らは実によく勉強する。葉山の砂浜で日女大の英文学科の学生も加わり、総勢２００人余で「学生時代」を歌った…。

## No. 4　Besame Mucho（昭和３０年代以降）

この歌は1940年、日米開戦の前年にメキシコのコンスエロ・ベラスケスによって書かれた楽曲。「わたしにもっと、もっとキスしてえ！」という、凄い情欲のあふれ返った歌である。英語訳では、Kiss me again and again.　当初はギターとハープがバッキングしていたが、トランペットも情欲を掻き立てる。コンスエロはこの時点でまだキッスの経験がなかったとか。
日本では昭和３０年代後半、「ベサメムーチョ」が大流行。当時森本毅郎は銀座「タクト」でハワイアンを、僕は新橋「ショウボート」でディック・ミネの前座を、ジュン葉山君は時代が２０年下って、銀座で本場のジャズソングや「ベサメムーチョ」を歌っていた。本日は彼女の恩師、ベースの大家の根市タカオ氏がご臨席のはず。また古賀政男師のご家族もおみえになるはず…。

## No.5　Kamakura Lonely Love（昭和９０年代以降）　作詞作曲　ジュン葉山

　愛はイニシエの昔から。男女の愛、孝養の愛、姉妹兄弟の愛から愛国、愛社、愛欲、情愛、郷土愛。愛には対象が不可欠。自己愛も愛他主義も愛の一つで、偏向した愛と取り組んだ作家たちは多い。谷崎文学の盲目の世界を描いた「春琴抄」には、盲目の春琴を愛するがあまり、自らも盲目（めしい）となる恋人の偏愛を描く。この自虐性は三島の『金閣寺』に見る破壊型とは対照的。 Kamakura Lonely Loveもその一つで、浪漫の耽美主義をこよなく愛して追求したならば、かく申す純愛にいたる。その愛の形象を謡うジュン葉山自身が作詞作曲する究極の愛情物語といえる。

No.6　The End of the World（昭和１００年の後半）　作詞作曲　Skeeter Davis

愛はイニシエの昔から、と前曲の冒頭で言ったが、失恋もイニシエの昔からあって、失くした傷心を抱える日々はこの世の終わりだ。たとえ娘っ子が恋人に振られても、森羅万象は知らんぷり。なにもかもが終わりねあなたが去ると。

この歌はブレンダ・リーも唄えば八代亜紀も歌う。みな成功者ばかり。だが大スターが唄うより、傷つきやすい乙女が唄うから、いい。五輪真弓の「恋人よ」の歌詞とこの歌は、期せずして同じ心境で、聴けば胸にそっと手を当てたくなる。

No.7　南国土佐を後にして　（昭和34年）　**さぁ、みなさんご一緒に！**

これは今は亡きペギー葉山さんの持ち歌である。本年６月２３日午後９時からの「日テレ歌謡プレミアム」では吾等のスタージュン葉山君が唄わせて頂いた。この、南国土佐の豪快さを謡う唄は、実はペギーさんが唄う前、戦中、土佐出身の帝国陸海軍の兵隊さんたちから自然発生した歌だという。

豪快だが、いささかならず、お色気も感じる。「ゆうたちいかんちゃ、おらんくの池にゃ、潮吹く魚が泳ぎよる…」の辺りである。日テレ本社スタジオでは、ジュン君、まったく危なげなく満点撮影でした。土佐の皆さまも感謝感激で。

No.8　どじょっこふなっこ（昭和３０年代以降）作詞：濱野成秋（橘かほり）　作曲ジュン葉山

田舎育ちは幼いうちから、小川にはいって、泥鰌だの、鮒など日がな一日獲って遊ぶ。都会に出て来た仲間がある日、「おい、彼らやっぱり結婚するんだとよ。披露宴で君と歌を一緒に歌ってやろう」となるところから。

友人の結婚はある意味、ショックの日で、俺たちも結婚するか。と、マッチングが芽生えることも。東北地方から中卒で就職列車で上野駅に。ボストンバッグ片手に夜汽車で来た子たちは上野駅に降り立つ。彼らは「金の卵」と呼ばれて期待されるが、大都会の環境になじめず、田舎恋しで、夜など布団に入ると涙、涙。でも歯を食いしばって頑張り、同郷同士、「若い根っこの会」を作った。

今でも同郷同士、結婚話となると、村の小川で、どじょっこみたいなのをぶら下げてた、あの子が思い浮かぶ。だのにこの子は「銀恋」を一緒に歌おうだって！…さてどうなりますか、コミカルなリズムと共に拍子をとってご一緒に。

☆Intermission(小休憩)

**☆ジュン葉山君の「日本浪漫歌謡大賞」受賞を記念してCD近日発売。楽譜付きで、フルオーケストラ伴奏付。少数販売ですので、予約制です。係員が回りますのでお声掛けください。**

# 第二部　起ち上る女たち

No. 9　爪（昭和３０年代以降）　作詞作曲：平岡精二

「ふたり暮らしたアパートを、一人一人で出て行くの…」今聞くとテレサテンの「つぐない」のニューヴァージョンかと思われよう。ペギーさんはとても繊細な神経の持ち主だった。「爪」の歌い方も実に繊細で、僕にはペギーさんの気持ちが今になって判った気がする。

No.10 御成町ブルース（昭和１００年の後半）　作詞　濱野成秋(橘かほり)　作曲　ジュン葉山

「なぎさ橋ブルース」の後日談として登場した「御成町ブルース」は別れた二人が再会する日が１０年後に来た、という設定で始まる。場所は逗子から鎌倉御成町に移る。二人はもう情熱も冷めた中年初期か。会社でいえば課長さん同士恋愛をするって設定は成り立たない。でも女性の方はそわそわ。かつてのデートの場所で、どう切り出すか…。 この場合、二人の状況次第。この１０年の間に、相手の奥さんがいないとか、こちらの方は意に沿わぬ結婚をして困っているとか、状況の転変で思いが叶うかも。いや思い通りにはならぬ事態が別途発生して…とか。 いずれにせよ、再会したのである。大人の恋に戻り橋はない。

## No.11 夜霧のエスピオナージ（昭和元年から現代）　作詞　濱野成秋(橘かほり)　作曲　ジュン葉山

エスピオナージとはスパイのことである。「夜霧のブルース」と言えばディック・ミネの、カッコいい上海ものを想い出すが、あれは戦後に出た『地獄の顔』という映画に出て流行したが、実は戦時中に作って温めて置いた作品。

あれからほぼ100年、時は流れて、台湾問題がこじれて日中関係がまたおかしくなる近未来、女エスピオナージの啖呵がみどころ。主人公は入れ替わって、日本側が女性で中国側が男性という設定。共にラブラブ、お互いの意地っ張りが１世紀の間隙があっても際立つ。もちろんこれは全部フィクション。日中関係にこの種のトラブルは歌の世界だけにとどめよう。

## No.12ノストラダムスの魂（昭和１０５年あたり）　作詞　濱野成秋(橘かほり)　作曲　ジュン葉山

近々勃発するのは南海トラフの大地震と引き続いて起こる富士山の噴火だというが、筆者はロシアがウクライナで食えないと、矛先をジャパンに、を警戒せねばならないと警告を発したい。日本にはその危惧はあれど、世界の文明国にある大型の防災施設はゼロで情けない。葉山にある森戸神社の淵を覗くと、此処に或る日、大爆雷が炸裂し、極楽とんぼ状態の国民を叱り飛ばす預言者が出現するであろうと想えてならぬ…。まさか、と思う勿れ。神風の国ジャパンは危うい。

## No.13 二人の愛はダイアリー　作詞作曲　ジュン葉山

僭越ながら、私の父母の青年期の想い出を語らせてください。

父母は奇しくも大学の卒業旅行で土佐へ行き、運命の出会いをします。

その時は余程印象が良かったのでしょう、出会った父のことを母は忘れる事が出来なかったのです。母は、出会いから数年経って、親の決めた結婚話に踏み切れず、父に手紙を書いて、お会いしたいと…。親の猛反対を押し切って結婚しました。それから６０年。年を取るにつれ、認知症を患うことに。それでも母は父への変わらぬ気持ちを持ち続けた。母は英語の先生で自分の人生を自ら切り拓いて私のことも、叱りつけたりで、それが大船観音をモデルにした「涙の観音さま」という作品に。その尊敬と感謝の気持ちを込めて、永遠の愛を歌いたい。

## No.14 もう一度直球勝負　作詞作曲　ジュン葉山

**さぁ、みなさんご一緒に！**

これはフェミニズムの歌か。フェミニズムという言葉は１９世紀末の流行語で、「パリ万博」の直後、日露戦争の直前。日本では富国強兵。そんなのイヤだと頑張る与謝野晶子や平塚らいてうらが『青鞜』の意識改革に乗り出す。 暗い時代を経て戦後となり、女性のスカートの長さは景気に影響されるバブル時代へ。当時流行った女性の服はボディコンで、タイトなミニスカだった。これで扇子フリフリ踊っていたからもうハチャメチャ。

その賛否はともかく、失われた平成、大震災、コロナ禍など不景気、天災やパンデミックに襲われ沈滞ムードばかりじゃいけません。いま一度、女性の活気時代を思い出し、近寄る高齢など吹き飛ばし、みんなで歌おう、直球勝負！

PROFILE

### ジュン葉山

シンガーソングライター

ジュン葉山Youtube チャンネル登録 お願い致します！⇒

英語と音楽の才能は2歳から。慶応義塾大学英米文学科卒。在学中は混声合唱団「楽友会」。1987年㈱服部セイコーに入社。専務秘書に。その後結婚し子育て後、ジャズを本格的にマスター。ベーシストの根市タカオ氏、ピアノ大森史子氏に師事。ジャズ、ラテンレパートリー100曲以上。銀座Blue Eyes 六本木club t等で20年プロボーカリスト。2020年シンガーソングライターとして独立。2025年BS日テレ「歌謡プレミアム」出演、好評を得る。

### 濱野成秋

作家・作詞家・プロデューサー

日本浪漫学会HP⇒

著書『日朝もし戦えば』（中央公論社）の眼力で「ノストラダムスの魂」を作詞する。筆名「橘かほり」は家紋から。NY州立大客員教授時代に中世日本文学の幽玄の世界を語る。アメリカのPostmodern文学を日本の文芸誌に連載する。

明大、一橋大、早大、青学大などの講師歴。日本女子大学文学部教授歴。現在日本浪漫学会会長。博士論文審査員資格。著書編著多数。